

アンパイア（第6話）

『おはよう。あれ、みんなは？』

前日に雨が降った7月の暑い日。今日は県東地区中学野球大会 準決勝・決勝の日だった。球場には朝6時の集合だったが、役員の先生方はいなかった。

『グラウンドに水たまり残っていたから、みんな朝5時から来て会場準備をしていましたよ。ひと仕事終わったって言って朝食を食べに行きました。』留守番役を任された若い先生が、押見に向かって言った。

『押見先生、俺達の仕事って何ですかね。今日は土曜日ですよ。月曜日から金曜日までハードな仕事をさせられて、週末は朝早くから部活の指導……。そして週明けから、また仕事……。いくら何でも辛すぎませんか？』

『いいこと教えてやろうか？徳川幕府の格言で『農民は生かさぬよう、殺さぬよう。』っていう言葉があるんだ。農民が富を持ち、それで武器を買えるようになると大規模な一揆の恐れがある、しかし死んでしまえば米は作れない。そこで、わずかな収入と少しのやりがいを農民に与えて、年貢をしばり取るんだ。』

『そういえば、昨日、週末手当として本部から1000円もらいました。ここまでのガソリン代にもならないけど…。確かに少しありがたいっていう気持ちになりました。』

『おはよう。あれっ、みんなは？』本部席に、県東地区で一番年長の名将が入ってきた。『先生、おはようございます。若い先生達は朝早くから来て、球場整備を終わらせたようです。本当に頭が下がりますね。我々の若い頃より、今の先生の方がしっかりしていますね。』

『俺らも俺らでしっかりやっていたけどね。そうそう、押見先生、これ飲みなよ。』名将は、抱えた大きなクーラーボックスをあけた。そこには、氷でキンキンに冷えた、たくさんの飲み物があつた。

『いつもすみません。俺、普段はコーヒーしか飲まないんですけど。先生からの差し入れの時、いつもロイヤルミルクティーに目がいつちやうんですよね。今日もいただいていいですか？ 本当にいつもすみません。』

『なあに、お礼はパチンコの玉に言ってくれ。パチコンの玉が運んで来ただけだから。』そう言うと、名称は審判帽をかぶって、試合の準備を始めた。

『先生、甘酒が入っていますよ。これ飲んでもいいんですか？』

『おう、それは菓だよ。今日、グラウンドは40℃超えになるだろうから、それを飲んだらきくぞ。』押見は甘酒缶の後ろを見た。そこには種類 炭酸飲料と書いてあつた。

グラウンドに太陽の光がさし始めた。そして戦いに挑む、選手達の大きな掛け声が聞こえた。朝食を終えたアンパイア達が、グラウンドに現れた。